

保護された直後の様子
動くことができず、目だけが反応する状態だった。
体長はおおよそ30cm。ちょうどラグビーボールくらい。

目：フクロウ目 strigiformes
科：フクロウ科 strigidae
種：フクロウ *S.uralensis*
和名：フクロウ
英名：Ural Owl

ある「小さな事件」の経緯

平成18年11月26日。

寒さも厳しさを増し始めた冬の初め。

朝一番で登校した生徒数人と山崎教諭は、校長室近くに落ちている黒い固まりを見つけた。

1羽の瀕死のフクロウだった。

ぐったりとして息も絶え絶えのフクロウは、周りの物音に目で反応するが、体はピクリとも動かない。

今にも死んでしまうのでは？

そういう様子だった。

山崎教諭と生徒たちは、すぐに渡邊教頭に連絡、どうすれば良いか考えた。

そして思い当たったのが、その頃、生涯学習の一環として野鳥などの講師をお願いしていた澤本等さんだった。

澤本さんは元日本野鳥の会会員で、普段から精力的に野山を歩き、自然や野鳥のことに精通している。

学校から連絡を受けた澤本さんは、中学校に駆けつけフクロウの状態を確認。そして、日本平動物園に保護を求めた。

動物園では受け入れを快諾。澤本さんの手によって動物園に引き渡された。

中川根中学校では、以前にも野鳥が窓ガラスにぶつかることがあったため、同じような状況だったのではと推測している。

動物園に引き渡されたフクロウは、手厚い治療と看護により徐々に回復していった。

年が明けて今年1月、学校に1本の電話が入った。



「フクロウはもう大丈夫」という動物園からの連絡だった。

学校では感謝を述べ、引き取りを希望。

渡邊教頭が動物園を訪問した。

そこには元気になったフクロウの姿があった。1月19日のことだった。

中学校では、総合的な学習の時間の中で環境破壊や、絶滅危惧動物、ゴミの問題など、自然・環境に関するテーマを学ぶ生徒が何人かいて、その中に偶然「フクロウ」をテーマに学習している大石悠馬さん（3年・久保尾）がいた。フクロウの生態や、その生活環境について学んでいた大石さんは、1月20日に行われた中川根中学校の総合学習発表会で、研究成果や自分の考えなどを、元気になったフクロウと並んで発表した。

発表会が終わり、同日午後1時頃、先生と生徒たち約20人は、フクロウを自然に帰すため中学校にほど近い森に向かった。

扉を開けたかごから、生徒を代表して大石さんがフクロウを取り出す。

最初は驚いた様子で少し暴れたフクロウだったが、人の手に収まるとおとなしくなった。

生徒たちのかけ声を合図に、大石さんは森に向かって勢いよくフクロウを放した。

生徒たちの声を翼に受けて、フクロウは力強く羽ばたき、森に消えていった。

生徒たちは、フクロウが飛んでいった方向をいつまでも目で追っていた。

渡邊教頭が獣医師から聞いたという、「動物は元々住んでいた環境に戻してあげるのが一番いいんです」という言葉が脳裏をよぎった。